

貧困地区で暮らす女の子の気持ち とお母さんの気持ち～ベトナム・フエ 市の水上生活者から学んだこと～

ベトナム中部の世界遺産の町・フエ市との関 わりについて

はじめに、簡単に自己紹介します。私は研究者ではなく、途上国のフィールドで研究者の方々と一緒にお仕事をさせて頂く機会がある人間です。そのため、フィールドで出会う人々やその暮らしは私の研究対象ではありません。私が、開発途上国のフィールドに出たはじめての経験は、青年海外協力隊員（以下、隊員）としてベトナム中部の世界遺産の町・フエ市で活動した2007年3月からの延長期間3か月を含む2年3か月間です。その後は、国際協力分野の実務者として日本やベトナムで仕事をしています。50年以上という歴史を持つこの協力隊事業では、派遣された時期や年度、国や職種によって隊員が経験することは様々です。私は任期中に、途上国とされていた頃のベトナムの一般的な市民と同じ生活をしながら活動することができ、その町の市民感覚を体得する機会を得られたと思っています。そのため、現地で人々と関わることで感情が動く度が高く、彼らと泥臭い関係性を結ぶことが「一般的な」研究者の方々

より多いように思っています（「一般的」としましたのは、そうでない方々にも出会ってきたためです）。また、そのようである理由のもう一つの理由は、隊員としての任期が終わった後も、仕事や大学院での学習のために数度に渡って長期間滞在する機会に恵まれたためだと思います。通算するとフエ市の人びととの関わりも11年目です。長く関わってきたと言っても、そこは外国です。何年経っても、知らないことを現地の人から教えられることの連続です。人々との関わりの中には貧困層の人々との関わりがあり、特に同じ女性として少女たちやその母親たちの様子から学んだことはたくさんあります。彼女たちとの関わりは、泥臭く、時には騙され、時には怒鳴り、感情を出さなければ乗り越えられない時もありました。しかし、彼女らの「今の状況をなんとかしたい」という気持ち、「仕方ないことだ」というあきらめの気持ちに触れる時、一緒に何かを出来ないものだろうかと思わされます。ここでは、私が関わってきたフエ市内に暮らす貧困層の人たち、特にお母さんと女の子から学んだことのほんの一部を記したいと思います。

ベトナム社会を表すキーワード：縁故社会・ 学歴社会・男尊女卑

ベトナム社会全般を表すキーワードとして、縁故

社会、学歴社会、男尊女卑をあげることができます。はじめてフエ市に赴任した2007年当時、フエ市はまだ大変に保守的なところでした。女性は適齢期になれば家同士が釣り合う相手と暦や占いでいいとされる日に結納式と結婚式を挙げ、第一子として男子を産むこと、お金を稼ぐことを含む一族のために働くことが期待されていました。結婚までは清く正しくいることが社会の暗黙の了解事項。実際に、結婚前に妊娠した若い女性が自分の将来を悲観して橋から身を投げたり、農村で望まれない妊娠で生まれた子が生き埋めにされたりということが新聞に載っていたりしました。「あの家の娘は結婚前に妊娠したけど相手の家から認めてもらえないんだよ」という話で悪者なのはいつも女性側。基本的に勤勉な人が多いのですが、男性の方がコネクションを保つためや情報入手の名目で、カフェに集ってタバコやコーヒーを楽しむ時間、お仲間たちとビールを飲んでいる時間が長く、なんとも男性の方が甘やかされている印象がありました。コネクションは血縁に限らず、学歴でも左右されるため、どの大学を卒業するかも重要です。大学入試の日には、関係者以外の方が試験会場に入れないように公安（日本でいう警察）が大学の警備にあたります。先生によい成績を付けてもらうことを期待した付け届けをすることは習慣化しています。日本のように大学の新卒生が一気に企業に採用されるシステムではないので、在

学中に就職活動は行なわれません。卒業証明証を手にしてから仕事を探すことになります。2007年からの11年間の間にベトナムの経済は大きく発展したこともあり、女性の社会や一族から受けるプレッシャーは緩んで来ているとは言え、未だに暗黙の縛りとして存在しています。一族の成功者を親族が取り囲んでいるような血縁重視の縁故主義の重要性は弱まっておらず、学歴はより重要視されるようになってきました。貧困地区に暮らす人たちが「左官屋になるにも、高校を出ていないとダメだ」と言うようになりました。縁故や学歴がない場合、閉塞感を感じる社会になっているのです。

フエ市に存在した水上生活者

1枚の写真を示します。



写真①集合写真

これらの写真は2009年の冬に、水上生活者の子どもたちの生活に関する簡単なインタビュー調査をした後に撮影したもので、当時「水上生活者」と呼ばれた少女たち14名と私、私の協力者たちが写っています。少女たちの年齢は、8歳から16歳。当時のフエ市内には、ベトナム語で「Dân vạ đò」（以下、日本語発音の「ヤンヴァンドー」と表記）と呼ばれる水上生活者たちが存在していました。「ヤンヴァンドー」を日本語にすると「舟で暮す人、水に関わる仕事をする人」という意味ですが、フエの人たちが「ヤンヴァンドー」と言う時、差別的に「学がない」、「貧しい」といった意味が込められます。

当時、彼らは確かにフエ市を流れるフォン河やその支流に停泊させた小舟で暮らしていましたが、職業は魚獲りやアサリ採取、砂利の採取や運搬などの水に関わる仕事をしている人たちは一握りで、多くはシクロと呼ばれる自転車タクシーの運転手や市場の荷役、宝くじや茹でピーナッツ売りといったインフォーマルセクターで働いていました。また、読み書きが出来ない人や小学校しか卒業していない大人も少なくはありませんでした。加えて、フエ市はベトナム国内でも台風や大雨が多い自然災害の常襲地であり、水上に浮かべた小舟で暮らす彼らの子どもの中には水害時に命を落とすものもいました。



写真②舟は住居でもあった

この写真を撮影した半年後、水上生活者の姿はフエ市内から消えました。フエ市は、安全、景観、衛生面などの理由から水上生活者を陸地に定住させる政策を実行したのです。この定住政策は、行政側も水上生活者側も長年望んでいたものであり、「これでヤンヴァンドーとは呼ばれない」という言葉を何人もの水上生活者から聞き、彼らが如何に陸にあがることを望んでいるかを知りました。定住政策には、住宅用地もしくは集合住宅の一室を貸与すること、低利の住宅建築費の貸付や一定期間の室料の免除制度も含まれていました。しかし、仕事に対する配慮はなく、仕事をしていた場所から離れることから不利益を被る人たちもいました。そのため、この定住政策実施を機会に、フエ市から離れる世帯もありました。

水上生活者の女の子の気持ち

写真の少女たちに話を戻します。経済的に困窮し、読み書きが不自由だったり、小学校しか卒業していなかったりする親であったとしても、子どもたちの教育への関心はゼロではありません。11年経った少女たちの最終学歴は、小学校中退者が3名、中学中退者が1名、中学卒業者が6名、高校卒業者が4名です。なんとか上の学校に行かせたいと願っている親は多いのです。しかし、親が文字を読めなかった場合、子どもたちに教育を受

けさせることに影響が出るのも事実です。14名の少女たちの内5組の親たちは読み書きが出来ず、そのうち3組の親たちの子どもは小学校中退です。またこの小学校中退者のうち2名は読み書きが出来ません。この5組の親たちに共通していたのが、子どもの出生届を出していなかったことでした。出生届の重要性に気づいたのは、小学校入学手続きの時。届けが出されていない場合、遡って出生の事実を証明することを求められました。証明する書類をなんとか準備した頃には小学校への入学手続きの期日は過ぎ去っていました。煩雑な手続きを読み書きのできない親がするとなると大変な労力を強いられます。日銭仕事をしているので仕事を休むわけにもいかず、時間の工面も大変なものでした。そうして、やっと入った小学校。ベトナムの小学校では落第があります。入学年が遅れて学習意欲が落ちているところに、親たちが家計を助けて欲しいと茹でピーナッツ売りを手伝わせたりしていました。家で予習や復習をする時間がないと、落第して中退に繋がってしまうのです。とても簡単に、子どもの「学校に行く」、「勉強を続ける」という選択肢は奪われるのです。では、少女たちは「読み書きが出来ない」ことをどう感じているのでしょうか。写真の調査の際に、何人かの読み書きできる少女が私の耳元で、「●●ちゃんは、字が読めないから。読んだり書いたりしなくてもいいようにしてあげて。恥ずかしくないよ

うにしてあげて」と、必死で訴えました。読み書き出来ない少女たちは、そういったことを訴え出ることはありませんでした。調査自体は、読んだり書いたりする必要は一切ないものでした。「読んだり書いたり出来ない」と思っていることを学びました。そして、読み書き出来ない少女たちは、内心ではどう感じていたのだろうか。今でも考えさせられることがあります。「読んだり書いたりして、って言われたらどうしよう」と不安だったかもしれません。フィールドでは、こういった気持ちにも配慮が必要であると学びました。

元水上生活者のお母さんの気持ち

11年の歳月の間に、写真の中の少女たちの多くも母親になりました。また生活のために一家でフエ市を離れた家もありますし、学校を出た後にベトナム南部で仕事をしているものもあります。母親になったうちの何人かは、妊娠が先でした。ある時、元水上生活者の定住区を訪ねた時、私のことを見知っているという人から声をかけられ、少女のうちの一人がもうすぐ母親になると聞かされました。これはおめでたいことだと、その少女の家を訪問した時のことです。この少女は高校を卒業して、フエ市内の仕立屋で見習いをしていました。少女は家におらず、母親が出迎えてくれました。母親としばらくぶりにあった挨拶の会話をしていると、家の奥から父親がフラフラと出てきて、私

に握手のための手を差し出しました。私は差し出された手に手を差し出すことをためらいました。彼の顔は紙のように白く、こんなにも人の顔は浮腫むものなのかというほどに腫れあがっていたからです。言葉は聞き取れないほどにか細いものでした。彼はすぐに家の奥に消えていきました。母親は、淡々と家の奥に消えていった自分の配偶者のことから話始めました。2年ほど前にサッカー賭博で負けて、仕事道具のシクロ（自転車タクシー用の自転車）を借金の形に取られ、ビールを飲む量が増えたこと。酔っばらって喧嘩をして足にケガをしてから寝ていることが多くなり、飲んでいたビールがウォッカになりしている間に体が浮腫むようになってきたので病院に連れて行ったら肝臓の重い病気で、もうそんなに長くはないと言われていること。母親が持っている市場の売り場の権利を形に高利貸しから借金をして薬代を工面してきたが、もうその売り場の権利を取り上げられそうであること。私が訪ねた少女は確かに妊娠しているが、相手の家から「ヤンヴァンドーとは結婚できない」と言われていること。母親は身を粉にして働き配偶者の尻拭いをしてきたのに、彼には死が迫ってきていました。必死の思いで高校まで卒業させた娘にも困難が訪れていました。私は、母親の肩に手をおいて、結婚を認めてもらえることと借金の返済が出来ることを祈っていると伝えるのが精一杯でした。彼女は、笑いながら「ベ

トナムの女だからね」と言いました。ベトナムの女だから苦労も背負っていくという意味なのか、ベトナムの女だから仕方ないという意味のあきらめなのか、はわかりません。しかし、母親たちは、強くたくましく一家を支えているのだと学ばされました。そして、このようなケースは、この地区ではごく一般的な現実なのです。ただ、彼女たちにもう少し違う選択肢があった場合、例えば、配偶者を選べる状況にあったなら、ちゃんとしたところでお金を借りられたなら、状況が違ってくるように感じてならないのです。

では、私たちができることはないのでしょうか。子どもたちが「文字が読めないことは恥ずかしい」と思わなくてもいいように学習できる環境を準備すること、どんなに貧しくても自分の子どもに教育を授けたいと思っている親を勇気づけながら、子どもたちがより高等教育に進めるように教科を教えることが出来るように考えます。現在、日本人研究者の先生、フエ市に暮らす志ある大学生や一般市民のパートナーたちと私が、小さな学習支援活動をフエ市の水上生活者の定住地区で実施しています。そのお話については、別の機会に紹介出来れば幸いです。

高木佳子（たかぎよしこ）